



オンライン研修@マラヤ大学  
研修報告書(2020年夏)

English Language Course

## 目次

a.	プログラムの概要 .....	2
b.	プログラムのハイライト .....	3
c.	研修体験・成果 .....	5

## a. プログラムの概要

このプログラムはマレーシアのマラヤ大学が主催する「summer enrichment programme」という名前のオンライン型の海外体験プログラムであり、8/24 から 9/11 までの3週間に渡って開催された。学生はマレーシア、タイ、日本の3カ国から参加していた。授業が開かれたのは平日の5日間であり、1日に2コマずつの各2時間であった。開講時間は、日本時間で 9:30~11:30, 12:30~14:30 であり、3週間で計 60 時間の授業が行われた。授業の種類は Malaysian Studies, Speaking and Pronunciation, Writing and Composition, Reading and Vocabulary, Grammar Usage の5つであり、3週間を通して各授業が6回ずつ行われる形である。また、参加学生一人一人にマラヤ大学の学生がバディとしてついて交流を行い、さらに授業後や休日には、マラヤ大学の学生が主催する交流会も行われた。以下では、各授業の内容と課外活動を具体的に述べる。

### ・Malaysian Studies

講師は Ms. Siti Nurbaini binti Mat Zin

この授業では講義や、クイズ、議論を通してマレーシアの歴史や宗教、また伝統的な衣装や食べ物などの文化を学んだ。

### ・Speaking and Pronunciation

講師は Ms. Nur Amira Pang Abdullah

この授業では、自信を持ってより流暢に英語を話せるようになることを目的として、自分自身に関するスピーチ、自分の意見を表現する練習をクラスメートと行った。また、授業の最後には英語での討論を行った。

### ・Writing and Composition

講師は Mr. Mohd Shaiful Rizal Hassan

この授業では英語の文章における文章構造について学び、賛成意見や反対意見を述べる文章やグラフから読み取れることを述べる文章、さらには物語りなどの書き方を習得した。

### ・Reading and Vocabulary

講師は Ms. Nur Hakimah Adilah Binti Mohd Zaini

この授業では様々なテーマの文章を扱い、そのテーマについての理解を深めると共に、文章内に出てくる語句やその類義語を学んだ。

### ・Grammar Usage

講師は Mr. Hashim Ghany bin Ibrahim

この授業では主に英語の時制について取り扱い、例文や問題を通して文法に対する理解を深めた。

### ・Online Activities

課外活動の交流会ではクイズや映画、ゲーム等の活動を通して学生間の仲を深め、またマレーシアの文化についてもさらに学ぶことができた。

## b. プログラムのハイライト

### 課題が多く見つかったディベートセッション（工学部 1年 三輪直暉）

私が今回のプログラムで印象的だったことは、スピーキングの授業の一環として行われたディベートだ。これは、それまでの授業で学んだ自然かつ流暢に英語を話す方法や”In my opinion, I suppose~”などの自分の意見を主張する方法を実践することが目的だった。クラスは2等分され、それぞれに「コロナは害より恩恵の方が大きい」と「男性は女性より強い」というトピックとこれに賛成か反対かという立場が与えられ議論した。私は前者の議題に反対の立場として参加した。今回、初めて英語でのディベートに参加した。マラヤ大学の学生は原稿を用意しなくても相手の意見を元にした発表をスムーズにできていた一方で、私は説得力のあるスピーチをするには英語力が足りないことを痛感した。発表に抑揚を付けられず、さらに原稿を読んでいたため、相手の意見を踏まえた反論が十分にできなかった。相手の意見を踏まえた発表ができないと、互いに自分の主張を述べるだけになってしまう。これでは議論を深めることができないため、特にここを改善したい。以上の様に初めて英語のディベートに参加したが、課題が多く見つかった。次回の機会では相手の意見を踏まえた発言と抑揚の付けた発表をスムーズにできるように、英語学習に取り組みたい。

### Grammar Usage Class（薬学部 1年 杉本愛美）

文法の授業では英語で12種類の時制を学んだ。今まで学んできたことはあるが今回英語で詳しく学びなおすことによって、より理解が深まった。例えば、未来を表す表現として、will や be going to があるが、これらには使い分ける必要がある。どちらも未来の予測を表す場合には使えるが、あらかじめ決まっている予定は be going to、話し手がその場で決めた意思は will を使う。これは当たり前なことだと思う人もいると思うが、すでに学んだことでも、今まで学びなおす時間を取ることがあまりなかったため、今回良い機会を得られたと思う。6回の授業を終え、まだ文法を完璧に理解できたわけではないが、多くの演習問題をこなしたことで、実践的なレベルでの活用に一步近づけたと思う。また、この授業ではグループで問題を解く機会も何度かあり、自主的に行動する力も多少鍛えることができた。

### マレーシアの文化（工学部 1年 黒澤大河）

今回のプログラムの中に、マレーシアの文化を学ぶ授業があった。私は海外に行ったことが無く、これまで日本以外の国について詳しく知る機会が無かった。そのため今回の研修でマレーシアの文化を詳しく知ることができて面白かった。今回の授業で学んだものの一部を紹介する。

マレーシアには13の州があり、そのうち9つの州に君主がいる。その9人の君主の中からマレーシアの国王が選ばれ、国王は5年ごとに交代する。これは日本の天皇とは全く違う仕組みになっ

ていて面白かった。

また、マレーシアは他民族国家で、主にマレー系、中国系、インド系などの民族がいる。このように民族が多様であることは、マレーシアがイギリスの植民地だったころに中国やインドから労働者としてたくさんの人がやってきたことなどが理由だ。そして、それぞれの民族が信仰している宗教などの違いで、民族ごとの祝日や衣服、儀式の形式が異なる。このように国内で文化の違いがあることは日本とは異なったため新鮮だった。

## バディとの交流 (工学部 1年 古谷野皓大)

私のプログラムのハイライトはマレーシアのバディである Kai Lun との交流である。今回のプログラムでは、現地のマラヤ大学の学生が1人ずつにつき、授業や交流会等でのサポートをしてくれる仕組みがあり、私についたのが彼だった。彼は私と同じ20歳の学生で、出身はマレーシアであるが、マレーシアに最も多いマレー民族ではなく、中国系だった。そのため、東アジア系であることから親近感を感じることも多く、彼も私にフレンドリーに接してくれた。今回は、プログラム自体が日本から現地のオンライン授業に参加する形式であったことから、授業時間外に英語を話す機会は多くなかったため、バディとの授業時間外の会話が非常に大きな意味があった。LINE を使ってお互いの出身地の観光地や食べ物を紹介し合い、また好きな音楽などについても話をした。さらにはビデオ通話を用いて、互いの部屋を紹介するなど多くの交流を行った。この交流によって、私は同年代の学生から見たマレーシアを知ることができ、出身地や文化的背景の違いによる価値観の差についても学ぶことができた。また、彼がバディであって良かったと考える理由の1つに、彼の最も得意な言語が中国語であることが挙げられる。彼にとっても英語は第2言語であり、勉強中なのだ。彼の英語は完璧だと思い込んでいたが、そんなこともなく、例えば文法について、私が彼に教えることもあった。しかし、話し言葉としての英語に関しては圧倒的に彼の方が熟達しており、彼の使う表現や話すスピードから多くのことを学んだ。一方的に学ぶだけだと気が引けていた部分もあったかもしれないが、私も時に教える側に回ることもあり、互いに切磋琢磨できたことに大きな意味があった。彼と過ごした時間は非常に濃密なものであり、私にとって、プログラムのハイライトと言える。

## c. 研修体験・成果

### 研修での成長と発見

工学部 1年 三輪直暉

今回のプログラムで得られた成果として言語運用能力、異文化適応力、行動力の3点と研修体験として自分が感じた「国ごとの英語の違い」について述べる。

まず、研修成果の一つである言語運用能力は60時間にも及ぶ授業を受けることで4技能全ての能力を向上させることができた。特にライティングは基本的な構文を学び、リスニングとスピーキングは授業の中で会話をする機会が多くあったため向上できた。これらの進歩をTOEFLなど今後の英語学習に活かしていきたい。次に異文化適応力に関してはイスラム教徒のバディと共に学んだことに加えて、マレーシアについて学ぶ授業を受けたことで異文化について「知る」ことはできた。具体的にはイスラム教徒の生活習慣、マレーシアの人々は1日5回食事をとること、そしてKLCCタワーを筆頭とするマレーシアの観光地などだ。しかし、今回はオンラインであったため実際にこれらを感じる機会がなく、異文化への「適応力」は身に付かなかった。例えば、前述の1日5回の食事は回数が多い分1回あたりの量は少ないのか、それとも私たちが毎食食べる量を5回も食べているのかは分からない。この実際の食事量によって自分がマレーシアの文化に「適応」する上ですべきことが変わると考える。最後に行動力については、今回のプログラムは誰も経験したことのないオンライン海外研修であり、参加すること自体が行動力を必要とすることであった。さらに、他の参加者と授業後にただ話すのにも対面であれば声をかけるだけで済む一方で、オンラインでは連絡をとって予定を合わせてからビデオチャットをする必要があり行動力が必要であった。以上の様に、このプログラム全体を通して行動力が向上した。

研修体験としては、幼少期に米国に住んでいた経験から国ごとの英語の違いを感じた。例えば、理由を説明する際に米国ではbecauseを使うことが多いのに対し、マレーシアではsinceであるという語法の違いが見られた。さらに、日本人はアメリカ英語を好むように自分は感じるがマレーシア人はイギリス英語を好むという英語の嗜好の違いも見られた。このように同じ英語という言語を使用しているにも関わらず、国ごとに違いがあることが興味深かった。

以上の様にオンラインプログラムでは英語を勉強したり、他の国の人々の生活を学んだりするには有意義な時間を過ごせた。また、馴染みのない場所へ移動しなくて済むという精神的・肉体的負担やプログラムに参加するコストが対面のものより低いという金銭的な負担が抑えられるというメリットもある。しかし、異文化適応力で述べたように海外を「経験する」という面では物足りないように感じた。そこで、今回のようなオンラインでのプログラムは海外留学を考えているが決めかねていたり、不安で踏み出せないでいたりする人が留学前の体験のようなものとして利用することをお勧めしたい。

## マラヤ大学オンライン留学による研修成果

薬学部 1 年 杉本愛美

本プログラムでは、英語 4 技能に加えてマレーシアの文化を英語で学ぶことができた。3 週間という期間は長いようであるという間で、すばらしい仲間とともに充実した日々を過ごすことができた。このプログラムに参加する前、私は英語が得意だという意識は全くなく、むしろスピーキングに関してはかなりの苦手意識を持っていた。プログラムに参加する前は SLA が主催しているオンラインの | on | 英会話を活用して何度かスピーキングの練習を行った。しかしプログラムが始まるまでの数回では上達は感じられず、不安を抱えたままプログラムの開始となった。以下では、英語に得意意識がなかった私の言語運用力、異文化適応力、行動力の 3 点から見た成果について述べる。

まず、言語運用力について述べる。プログラムに参加した 3 週間、授業やバディとのビデオ通話、チャットを通してたくさん英語に触れることができた。特に、リスニングに関してはかなり慣れ、完璧に聞き取れるようになったわけではないが参加前よりは自信がついた。一方苦手意識が強く、能力の向上を期待していたスピーキングについては、そこまで上達したと感ずることはできなかった。授業内のフリートーキングや授業外のバディとのやり取りによって、英語を話す機会は得られたが、3 週間という機会では短すぎると感じた。しかし、全く自信がない状態からは一歩進めたと感じている。

次に、異文化適応力について、これまで他国の文化を学ぶという機会があまりなかったため、楽しく学習することができた。実際に現地に行っていないので適応できたかどうかは不明だが、日本との違いを感じられた。また、私は国内旅行もほとんどしたことがなく、有名な観光地や歴史は知っていても、それ以上のことは何も知らなかったため、自分がどれほど日本文化に無知であるのかを理解するいい機会となった。

最後に、行動力について述べる。私はもともと受け身で行動することが多く、自分から積極的に行動することが苦手だった。しかし、すべての授業やコミュニケーションを英語で行わなければならないこのプログラムで、多少この性格を変えることができたと感じている。授業でわからないことや、課題で疑問に思ったことは状況的に放っておくことが不可能だったので、バディに積極的に質問をし、アドバイスをもらうことが多かった。また、グループワークも何度かあり、意見を求められて答えたり、自分から意見を発信することが必要だったりしたので、以前に比べてかなり積極的に行動できるようになったと感じている。

このプログラムを通して、期待以上の英語力の向上をすることはできなかった。しかし、英語に対する抵抗は減った。満足のいくレベルでの英語力の向上にはまだまだ時間が必要だが、このプログラムは自分の英語力の低さを身にしみて感じ、これからの学習への意欲を高めるよいきっかけとなった。

## 成長と課題の発見

工学部 1年 黒澤大河

今回のプログラムの成果として、英語の能力と異文化理解、行動力の3つに関して述べる。

まず、英語の能力についての成果について書く。英語を書く能力に関しては、私は以前から自信がなかった。英語を書く機会は大学の授業などでもあったが、ただ書きたいことを羅列する文章のようになってしまったため英語を書く能力を向上させたいと思っていた。今回のプログラムで英語を書く練習をする授業があり、その授業では、意見を述べる文章、物語、示されたデータを客観的に説明する文章といった様々な種類の文章の書き方を教わった。この研修のおかげで以前よりも分かりやすく説得力のある文書を書くことができるようになった。

英語を聞く力に関しては、今回のプログラムでは先生の話聞く時間がかかなり多かったので練習できた。先生は聞きやすいスピードではっきり話してくれたため、大体聞き取ることができた。しかし、このプログラムを終えた後に、英語のリスニング教材が劇的に聞きやすくなったという感じはしなかった。このプログラムで多少慣れることはできたが、まだ練習が必要だと思った。

英語を話す力は、このプログラムでの向上を最も期待していたものだった。思ったより英語を話す機会は多くなかったが、英語を話すことへの抵抗は少なくなった。また、スピーキングの授業でディベートをする機会があり、相手が言ったことへの反論をその場で考えて話す必要があった。このとき、話したいことは思いついていたが、英語にすることができず全てを伝えられなかった。この経験から、英語で話すのは難しいのだと改めて実感できた。このようなことは普段の生活では気づけないため、このプログラムに参加して良かったと感じた。

次に、異文化理解に関する成果を2つ紹介する。まず一つは、マレーシアの人は宗教の信仰心が日本よりも強い傾向にあると学べた事だ。特にマレー系でイスラム教を信仰している人について感じた。私のパートナーのマレー系の人は、朝の礼拝をするために6時前には起きていると言っていた。また、金曜日はモスクに礼拝に行く学生が授業を途中で退出していたり、ムスリムの女性はヒジャブという布を頭に巻いていたりしていた。このようなことから、マレーシアの人は宗教と生活の結びつきが強いと感じた。

もう一つは、先生と生徒の距離が日本よりも近いことを知ることができた事だ。お互い冗談を言って笑ったり、授業中に生徒が発言する回数が多かったりして日本よりも先生と生徒の仲がいいと感じた。これは英語に敬語のような表現が少ないことが一つの理由かも知れないが、このような授業の雰囲気は居心地がいいと感じた。

最後に、行動力については、授業の宿題などで数人の学生で協力する活動がいくつかあり、英語でコミュニケーションをとることは難しかったが、グループのリーダーを務めて分担の仕方を提案するなど積極的に行動することができた。また、今回初めて英語を使ってコミュニケーションを取る経験ができ、英語に対する恐怖心が減少し、今後も英語による活動に積極的に参加しやすくなった。

このプログラムは、英語の能力の向上だけでなく、英語の難しいところを知ることができたり、英語に対する抵抗がなくなるなど今後生きるものとなった。



## 日常会話への慣れと英語で議論する力

工学部 1年 古谷野皓大

このプログラムにおける最も大きな研修の成果は、英語での会話に慣れたことであると思う。ここで述べる英語での会話に慣れるということは、英語でペラペラに話せるようになったと言うことではなく、話し言葉で使われる英語を聞き取ることが上達し、会話のテンポやスピードに慣れるということである。ここでは、学習成果として、英語での会話への慣れによる日常会話力の向上に焦点を当て、議論する力と比較しながら述べる。

まずは日常会話力についてである。私はこの研修を受ける前まで、生の英語に触れる機会があまりなかった。あったとしても授業等で先生が話しているのを聞くことぐらいである。それ以外では、少し堅い英語に触れる機会が多かった。しかし、実際の会話ではもっと砕けた英語を用いる。生徒と先生の会話や生徒同士の会話を聞いて、その砕けた英語に触れた。彼らの会話は当然、リスニング問題のように同じスピードで交互に繰り返されるわけではない。相手の返答によって、その場で話すことを変えている。これは、私たちが日本語で会話するときも当然のことである。しかし、英語でこれを行うことの難しさをプログラムのはじめに強く感じた。自分が話そうと思っていること、用意していたことを話すだけでは、それは会話とは言えず、一方的なスピーチである。この会話について、いかに自分ができていないかを痛感し、その訓練を行うことができたのが、このプログラムだった。

特にスピーキングのクラス、放課後のアクティビティ、マレーシアのバディとの会話が役に立った。放課後のアクティビティとマレーシアのバディとの会話では、より砕けた英語を使うことが多く、多少の文法の間違いより、積極的にコミュニケーションを取ろうとする姿勢と、会話のテンポ、トーンでの表現が非常に重要であることを学び、3週間かけて徐々に実践することができるようになった。この実践には、聞き取りやすいように話してくれ、自身に多くの興味を示してくれたクラスメートの存在が大きく、この場を借りて感謝を述べたい。とっさに話そうと思ったことが英語で表現できずに会話のテンポを崩してしまったときも、彼らは暖かくサポートしてくれた。バディとの交流では、徐々に会話の波長を合わせるできるようになり、会話がすべて聞き取れないときも、彼のトーンや口調から言いたいことを推測できるようになった。相手の人柄を理解した上で会話することで、より英語を使うことに楽しみを見いだせるようになったと思う。

次に議論する力についてである。スピーキングのクラスではまだまだ会話する力が足りないことを身にしみて感じた。クラス内でディベートをすることがあり、事前に用意して練習した主張を述べることはできたものの、相手の主張に対して即座に論理的な反論を行うことはできず、焦ってしまった。こういった点は、これからの練習次第で解決することができることだと思う。具体的な改善点が見つかったことも、このプログラムの大きな成果である。

最後に改めてこのプログラムに関わってくれた人たちにお礼を言いたい。ありがとう！